

---

# 桜の下で君に会えた。

河野夜兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜の下で君に会えた。

### 【Nコード】

N4480J

### 【作者名】

河野夜兎

### 【あらすじ】

三夜連続して変な夢を見た。

両親の離婚で母の実家である田舎町に住む事になった私は、元々都会に住んでた人間だ。だから田舎なんて大っ嫌いなんだけど………。

『いつの日かまた巡り会う日が訪れたなら、あの場所で会おう』

誰かが私に笑いかける。そんな夢を三日続けて見た。

三月半ばの朝六時を過ぎた薄暗い部屋。

「なんか気持ち悪い…」

三度目の同じ夢に何だか言いようのない不気味さを覚え、私はのそりとベッドから這い出して、薄暗い部屋のカーテンを開け、外を眺める。

まだ夜が明けたばかりの窓の外の景色。

田舎独特の畑や木ばかりの自然溢れる、のどかで退屈な風景。

「…なんで私がこんな辺鄙な田舎暮らしをしなきゃいけないわけ？」  
景色を見つめて苛々混じりのため息を窓にぶつけてそれからくるりとそこに背中を向け、部屋の出口に向かい歩く。

「本当…最悪。」

胸のうちの理不尽さに絶えられずに愚痴が零れる。  
今この場所にいる事がとても憂鬱だ。

つい数日までは、周りは賑やかな街だったのに。

親の離婚でがらりと変わった生活環境。

父親には愛人がいて、続けなきゃいけない仕事も立場もあるから、

慰謝料払うから出ていけと言われ、母娘共に住み慣れたマンションを追い出された。

そして、母の実家であるこんな辺鄙な田舎暮らしをする羽目になった。

コンビニは自転車で十五分行ったところにひとつだけ。カラオケもアミューズメントパークも大型デパートもバスに一時間くらい揺られないと辿り着く事ができない。

娯楽という娯楽がないない尽くしのクソ田舎。遊びたい盛りの十七才には島流しばりの極刑をくらった絶望感。

「…本当最悪…」  
再度ため息と共にこぼれる言葉。ここへ来てから何度となくつぶやいてる。

携帯を開きメールを確認。  
誰からもメールが入ってないし着信さえ無くなった。  
所詮引越しちゃえば過去の人。友達付き合いなんて大体こんなものなんだと、またため息が出た。

スエットのパンツのポケットに携帯を挟込み、私は踏み締める度軋む木造の階段を降りて、一階の居間へ向かう。

古めかしい民家。

やたら間取りだけはだだっ広い。

一階は七畳の居間と八畳の部屋が襖を境に横つながりで二部屋。襖の奥は仏壇の置いてある部屋。

朝っぱらから線香の臭いがしてなんか辛気臭い。

居間の横には台所。

一応リフォームしてありフローリングのダイニングキッチンになっている。

広さは居間と同じ七畳くらいだろうか。

トントんとまな板の鳴る音と、朝食の味噌汁の匂い。

母が朝食の支度をしているんだろう。

祖父母は朝から畑仕事。

喉が渴いたから台所へ入り、食器棚からグラスを取り出して母の立つ台所へ。

「おはよう、美桜<sup>みお</sup>」

母は普段通り穏やかに笑い、お決まりの挨拶を発する。

「……………」

私は母を無視して水道の蛇口を捻り、グラスに水を汲み入れて渴いた喉に流し込む。

都会暮らしでは考えられない、浄水機無しの水道水。

水だけはミネラルウォーターみたいに綺麗でおいしい。まあ、たいした感動はないけど。

私はグラスをシンクに起き、母に背を向けた。

「朝ご飯……」

「いない。」

私は、母の言葉を遮り、二階の自室へと歩き出した。

こっちに來てから、……うん、両親が仲たがいが悪くなり半年以上、母とはろくすっぽ口を聞いてない。

母を見るとイライラする。

専業主婦で良妻賢母を絵に描いたような穏やかさを演じる母。

父親（元旦那）に刃向かう事はせず、ただ暴君的に振る舞う父親

の顔色ばかり伺って笑顔を絶やさずに、嫌な事は黙って堪えて、自分を殺して我慢ばかりして……。

揚げ句の果てには浮気されて捨てられて。  
それでも笑って……。

馬鹿みたいだ。

何が楽しくてへらへら笑ってんだか意味わかんないし。

二階に上がり、着替えを済ませて、私は家を出る。

こんな静かで辛気臭いところにいると気が滅入る。

学校が始まるまでの春休み、私は毎日バスに乗り街へ出る。

田舎暮らしはともじやないけど向いてない。

なり（格好）だって浮きまくってる。

キャラメルブラウンの胸下まで長い縦巻きウエーブヘアも、バッチリ決めたギャル系メイクも、ファッションだって、全て浮きまくり。

この町は私の存在を異端化させる。

だから田舎って嫌い。

私は自転車にまたがり、iPodをお供にバス停へと走る。

舗装されてないでこぼこ道がウザイ。

自転車を走らせるのに余分な体力を使う。

足太くなりそう……。

スゲーム力つくし……。

そんな事考え、イライラしながら自転車をこいでたら、パスンって音。

自転車が急にガタガタ震えて、ペダルが重くなる……。

「マジかよ……。」

自転車から降りて舌打ちし、前輪を恨めしげに睨む。

「……なんでこんな時にパンクすんのよ……。」

最悪……。

腹が立ち過ぎて自転車を蹴飛ばしたくなった。

確実にバスに乗り遅れる。

次のバスは一時間後。

「マジ最悪……。」

私は自転車を引きながら行き先を渋々バス停から町の寂れた商店街の自転車屋へと変更した。

歩いて二十分。

旧家が密集する場所の真ん中に、商店街へ下る坂道がありそこを六〇七分下ると、《丸山サイクル》と言う古めかしい自転車屋がある。

この界限で自転車のトラブルと言えばここしかない。それだけ周りには何も無い。

この町で自転車通学する学生の駆け込み寺的な場所らしいから覚えておくようにと、祖父に軽トラック（最悪！）に乗せられて案内されたこの商店街の自転車屋。

建て付けが悪いのか、店の横開きのアルミサッシの引き戸が中々開かない。

四苦八苦してると中から、

「すいませーん、今開けますから！」

奥から引き戸を開ける音と共に若い男の声と、サンダルを引っかけてずり歩くような音が近づいてきた。

「……」

男は私と近い歳くらい。身長は私（165センチ）とさほど変わらない、寝癖がついたようなポサポサの黒髪の痩せ型。

うん、田舎丸出しのダサイ男。

黒いジャージ姿…最悪。

滑りの悪いサッシの引き戸をガタガタと揺らして、ガラッと一気に引き、

「……………」

私を見て固まる。

その目はまるで異世界からの侵入者をみるような（何…コイツ？）みたいな目だった。

私はひと睨みして、

「…自転車、パンクしたんだけど。」

一言告げた。

男は、はつとして苦笑いしながら、

「あつ、ああ…、わかった。パンクね、うん。直すから……………」

若干どもるような途切れた会話を私に投げて自転車のハンドルを握り、店の中へと引き入れた。

「は？何？あんたが直すの？」

私は猜疑心に満ちた視線を投げる。

「パンクくらい直せるよ。だって、自転車屋の息子だし。」

やんわりと笑い、道具を出して作業の準備をする。

「ねえ、あんたいくつ？」

何となく黙ってるのが嫌だったから聞いてみた。

「十七。四月から高校三年。」

へえ、同じ歳なんだ。

「高校どこ？」

「北野高校。」

「……マジ？」

つぶやく私に訝しい顔を向けて首を傾げる。

「……四月から私も北野高校の三年生……。」

ため息混じりに鼻を鳴らしたら、男はガバツと立ち上がり、

「じゃあ、あんたが最近都会から越してきた噂の転校生か！？どうりでなんか格好とか派手で浮いてると思った！！」

マジマジと私を見つめて「ほえー……」とため息をつく。

面と向かつてはつきり言われると、逆にム力つかない……って言うか、あんまりコイツが間抜けた顔したもんだから、笑いさえ込み上げてきた。

越してきてのこの数日、ろくすっぽ誰とも会話してなかったし、増してやダサいけど同じ歳の男子と久しぶりに接触したからなんかどっか嬉しかったのかも知れない。

「俺、丸山孝之、まるやまたかゆきあんた名前、なんて言うの？」

丸山は自転車をいじりながら私に尋ねる。

おおきみお  
「大木美桜」

手短に伝え、作業を見つめる。

「この町に少しは慣れたか？」

「全然。っーか最悪だよ……。こんな田舎。」

悪態をつく私に、

「ははは、本当びっくりするくらいなぐんもないもんな。」

丸山は笑う。

「けどよ、慣れりゃ、悪い町じゃないよ。空気は綺麗だし、のんびりと静かだし。」

「静か過ぎて気持ち悪い。夜は真っ暗だし、なんか鳥とか鳴いてる

し。」

「夏は賑やかだぞ。カエルがいっぱい鳴いて。」

「うえっ!!最悪!!」

私は顔をしかめる。

「それに、蛭がな、飛ぶのは綺麗だぞ。」

「マジ!?蛭いるの?」

「ああ。榎山神社の近くの小川は、夏は蛭がいっぱい飛んでスゲー綺麗だぞ。」

「へえ。」

「あとな、もう少ししたら、神社の御神木さんの《枝垂れ桜》が綺麗に咲き誇る。」

丸山はにこやかに笑った。

「ふーん…、ってかどこにあるか知らないし。その神社。」

「よかつたら案内してやろうか?今はまだ六分咲きくらいだけど。」

「…そうだなあ…、うん。ちょっと興味出たから行きたい。」

気さくな丸山に何となく打ち解けた私は、街に出るのはやめて榎山神社に出かける事にした。

自転車の修理を終えて、私は丸山と自転車を並べてただっ広い田んぼの中の農道を走る。

田植え前で静まり返る干からびた田んぼを横目に、丸山と談笑しながら神社へ向かう。

学校の話とか、友達のバカ話とか、聞いてるうちに何だかすっかり私は丸山に打ち解けて顔はいつしか笑顔だった。

「ほら、ここが神社の入口」

丸山は自転車を停めて目の前の小さな石橋を指さす。

「ここが夏に蛍が飛び交う場所。本当スゲーんだぞ。」

「へえ…。」

透き通る水がせせらぎ流れる小川。でもいまいちイマジネーションがわからない。だって、蛍なんて実際テレビでちらっとしか観た事ないし。

自転車を降りて、石橋を渡り鬱蒼と茂る森の上まで延びる石段に目をやる。

「…マジ？ここ昇るの…？」

なんか階段を見ただけで疲れそうになる。

「なーに、そんなに大変じゃなーよ。ま、都会育ちの軟弱者には過酷かも知れないけど。」

挑発的な笑みに私はちよっとカチンとして、

「バカにすんなよ、都会育ちでも体力は結構あるんだから。」

私は鼻を鳴らして自転車のスタンドを立てて鍵をかけた。

でも内心は、ヒールの高いブーツは失敗だったかも…と嘆息した。

薄暗い森の石段を頂上へ向かい昇る。

「なんか虫とか出ないよね…？」

霊的なモノより、虫とか爬虫類に奇襲されるのが怖くて、辺りを警戒しながら段をゆっくり昇る。

「ははっ、大丈夫だって。まだ虫が這い出す時期じゃないし。」

若干拳動不審な私を見て楽しそうに笑う丸山、ちよっとムカつく…。

バサバサッ！！

「！！！」

頭上で何かが羽ばたく音に思わず身がすくみ足が止まる。

そんな私を見て、

「お前、意外と怖がりだなあ……」

ますます愉快そうに声を弾ませ、私の左の手を取る。

「どさくさに紛れて何手え繋いでんのよ。」

軽くひと睨みしたけど、内心ホッとしてる自分を否定できずに丸山の手を離さない私に、

「あははっ、さっさと歩かないとへび出るぞっ」

脳天気言い放つ。

「いやっ！嘘っ！」

私は恐怖で丸山にしがみつく形になる。

「……………」

にんまり笑う丸山。

コイツわざと嘘ついたな……。

「最悪！」

私は丸山の背中をグーで一発殴った。

「いつてえっっ！」

悶えながらもけらけらと楽しげに笑う丸山に、私もつられて笑い声を上げた。

繋いだ手がなんかあったかくて心地良い……。

それから二三分石段を昇ると杓が並べられた石造りの手洗い場にとどり着く。

透き通る水が細い竹の筒からチヨロチヨロと流れ出ている。そこで手を洗い清めて、頂上へ向かう石段に足をかける。

目線の上には石で出来た古めかしい鳥居が見えている。

昇りつめた眼前には、艶やかと言言葉には縁遠いひっそりとした木造の神社。その脇に否応なしに目を奪われる……。

「うわぁ……………」

思わず感嘆して声もれる。

「凄いだろ？」

丸山も感嘆気味で笑う。そして二人、それにゆつくりと歩み寄りどっしりとした太い幹。それと反して繊細な枝が半円を描き、まるで地面に流れ落ちるように垂れている。

その枝には淡いピンクの花が儂げに美しく咲いている。

所々にまだ蕾が混じってはいるけど、それでも十分に心を奪われる美しさだった。

まだ冷たさを感じる三月の風にそよぐ春の象徴に私は言葉を失い見とれてしまった。

「田舎も中々いいもんだろ？」

隣で丸山は小さく静かに笑う。

「田舎は嫌い。でもこの場所は好き…かな。」

私も小さく笑う。

その時、

『いつの日かまた巡り会う日が訪れたなら、あの場所で会おう』

何故だか突然連続して見た夢がフラッシュバックした……。

朧げな夢の記憶が鮮明に蘇る……

「…そっか、あの夢は……そうゆう事だったんだ…。」

なんの意図もなく、口から言葉がこぼれた。

「どうしたんだ？」

隣で不思議そうな顔をする丸山を見て、

「ねえ、生まれ変わりって信じる？」

私は丸山に体を向かい合わせて尋ねる。

「…なんでまた急に？」

私は少し戸惑い尋ね返す丸山の体にそっと抱き縋り、

「私、夢の中でこの場所でこうしてた…。」

目を閉じて温もりを感じ、確信した。

「多分、丸山と…。」

私は小さくつぶやく。

「いつの日かまた巡り会う日が訪れたなら、あの場所で会おうって、遠い昔に約束した。」

不思議な感覚だった。

口調はとても穏やかなのに、切なさで胸が痛くて……何だか涙が零れた。

丸山は、何も言わずに私の体をぎゅっと包み、ふうわりと瞳に暖かさを宿し、私に唇を重ねた。

時間が止まるような、急激に進むような、おかしい感覚に足がふらつきそうになったけど、今は丸山の唇の温度を離したくない。その一心だった。

ゆっくりと唇を離し、丸山と見つめ合う。

「何だろうな…、この懐かしい感じ。」

つぶやく丸山は再度私をぎゅっと抱きしめ、

「おかえり…。」

と私を愛おしむように小さくつぶやいた。

「ただいま…。」

どうしてこんな言葉をつぶやいたのかはわからない。けど自然と口から零れた。

「何だろうな、この不思議な感覚。」

丸山は枝垂れ桜に視線をやる。

「何だろうね…、この感覚…。」

私も同じように枝垂れ桜に視線をやる。

お互い、口には出さないけど、気付いた。

きつと、私達は前世で繋がり、生まれ変わりここに導かれたんだ。  
あの三夜連続の同じ夢は、神の、この桜の啓示だったんだと思う。  
「私がこの町へ来たのは、偶然じゃなくて、必然だったんだ…。」  
心の痛みがすうつと引いていく気がした。

「そうかもな…。」

つぶやき笑う丸山を見て、私も笑う。

「…この町が好きになりそうな気がする。」  
そうつぶやく私に

「なんか嬉しいな。」

丸山は飛び切り優しい笑顔を私に向けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4480j/>

---

桜の下で君に会えた。

2011年1月27日06時51分発行